

【 復活讃詞 第4調 】

しゅのおんなでしはふくかつのひかるおと
主女弟子は復活の光お音
づれをてんしよりききうけて、
天使聞き受
げんそよりのていざいをふるいすて、しと徒
原祖定罪を振棄使徒
にほこりていえり、しはほろぼさ
誇日死滅
れ、ハリストスカみはふくかつして、せかいに
神復活世界
おおいなるあわれみをたまえり。
大憐賜

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】

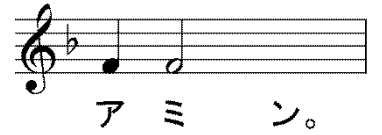
こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光榮父子聖神歸今
いつもよよに、アミン。
何時世世
しととひとしくどうざなるもの、ちゆう
使徒等同座者忠
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實神智役者聖
なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
神撰笛愛



にみちたるうつわ、わがくにのこう光
 満器我 國光
 しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照者 亞使徒主教聖
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾羊群爲 及
 ぜんせかいのために、いのちをたもうせい
 全世界爲 生命賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者祈 給

司祭) (黙誦：^{せい かみ せいじゃ うち いこ}聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしよう}聖者の中に息い、^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう}セラフィムより讃榮せられ、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ}悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい}願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい}を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの}る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ}なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ}以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい}を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ}生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等
 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主しゅの名なに依よりて來きたる者ものは崇あがめ讃ほめらる、へルヴィムざに座ものする者なんぢよ、爾そのくには其國
 の光こう榮えいの寶ほう座ざに在ありて恒つねに崇あがめ讃ほめらる、今いまも何いつ時よも世よに、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第4調 】

司祭) 慎つつしみて聽きくべし、衆しゅうじん人に平へい安あん、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿えいち智ち、

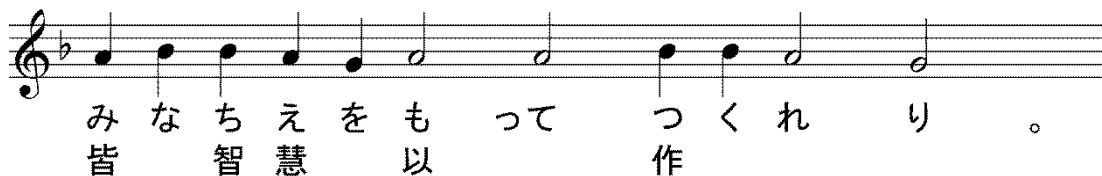
誦經) プロキメン、主しゅよ、爾なんぢの工しわざ業なんは何おおぞ多みなちえき、皆もつ智慧つくを以つくて作つくれり、

しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、
 主 爾 工 業 何 大
 き、
 みなちえをもつてつくれり。
 皆 智 慧 以 作

誦經) 我わが靈たましいよ、主しゅを讃ほめ揚あげよ、主しゅ我かみが神なんぢよ、爾いたは至おおいりて大おおいなり、

しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、
 主 爾 工 業 何 大
 き、
 みなちえをもつてつくれり。
 皆 智 慧 以 作

誦經) 主しゅよ、爾なんぢの工しわざ業なんは何おおぞ多おおいき、



【 使徒經 (アポストロス) 296 端 ティモフェイ後書 3 章 10~15 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{たつ}ティモフェイに^{ぜんしよ}達する^{よみ}前書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて^き聽くべし、

誦經) ^こ子ティモフェイよ、^{なんぢ}爾は^わ我が^{きょうくん}教訓、^{ひんこう}品行、^{いし}意志、^{しんこう}信仰、^{かんよう}寛容、^{じんあい}仁愛、^{にんたい}忍耐、^わ我が

アンテオキヤ、イコニヤ、リストラに在りて^あ遇い^あし^{ところ}所の^{きんちく}窘逐、^{およ}及び^{くなん}苦難に^{おい}於て、^{われ}我に^{したが}從

えり、^こ此の^{きんちく}窘逐は^{われ}我^{これ}之を^{しの}忍び、^{しゅ}主は^{われ}我を^{ことごと}悉く^{そのうち}其中より^{すく}救えり。凡そ^{およ}敬虔を^{もつ}以て、

ハリストス イイスに在りて^あ生を^{いのち}度らんと^{わた}欲する^{ほつ}者は、^{もの}皆^{みな}窘逐せられん。惡しき^あ人、^{ひと}及び

^{ひと}人を^{あざむ}欺く^{もの}者は、^{ますます}益惡に^{すす}進みて、^{ひと}人を^{まど}惑わし、^{みづから}自も^{まど}惑わされん。然れども^{しか}爾は^{なんぢ}學

びし^{ところ}所の、^{およ}及び^{なんぢ}爾に^{たく}託せられし^{ところ}所に^お居れ、^{なんぢ}爾誰より^{まな}學びし^しかを知ればなり。且^{かつ}爾は

^{いとけなき}幼より^{せいしよ}聖書を^し知る、^{すなわち}即^{なんぢ}善く^お爾に、^{しん}ハリストス イイスに^よ於ける^{すくい}信に^よりて、^{すくい}救を

^え得しむる^{ちえ}智慧を^{あた}與うる^{もの}者なり。

(比較用 口語訳) あなたは、わたしの教、歩み、こころざし、信仰、寛容、愛、忍耐、それから、わたしがアンテオケ、イコニオム、ルステラで受けた数々の迫害、苦難に、よくも続いてきてくれた。そのひどい迫害にわたしは耐えてきたが、主はそれらいつさいのことから、救い出して下さったのである。いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける。悪人と詐欺師とは人を惑わし人に惑わされて、悪から悪へと落ちていく。しかし、あなたは、自分が学んで確信しているところに、いつもとどまっていなさい。あなたは、それをだれから学んだか知っており、また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている。

司祭) ^{なんぢ} 爾に^{へいあん}平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾の^{しん}神にも、ア ril イヤ、

【 ア ril イヤ 主日第4調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



誦經) ^{かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんぺい せいちよく けんぺい} 神よ、爾の寶座は世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、



誦經) ^{なんぢ ぎ あい ふほう にく} 爾は義を愛し、不法を惡めり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書89端 18章10~14節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 主は左の譬を設けて曰えり、二人祈禱せん爲に殿に登れり、一はファリセイ、一は

税吏なり。ファリセイ立ちて、己の衷に斯く禱れり、神よ、我爾に感謝す我他人の殘

酷、不義、姦淫なる如く、或は此の税吏の如くならざるを以てなり。我一七日に、二

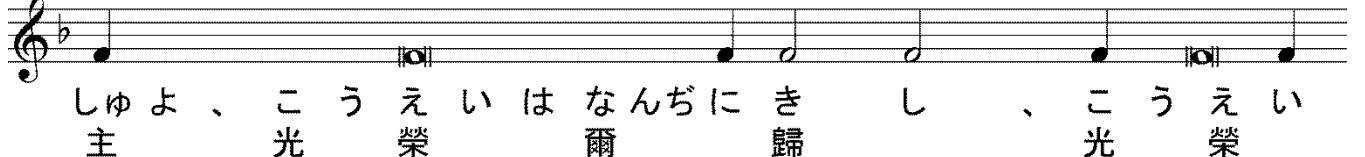
次齋し、凡そ得る所の十分の一を獻ぐと。税吏は遠く立ちて、敢て目を擧げて天

を仰がず、乃膺を拊ちて曰えり、神よ、我罪人を憐めと。我爾等に語ぐ、此の人は

彼の人よりは義とせられて、家に歸れり。蓋凡そ自ら高くする者は卑くせられ、自ら

卑くする者は高くせられん。

(比較用 口語訳) 「ふたりの人が祈るために宮に上った。そのひとはパリサイ人であり、もうひとは取税人であった。パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようとしないうで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしてください』と。あなたがたに言うておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。



は なんぢに き す 。
爾 歸